

サクラ

牧 幸 男

4月、我が国では新年度が始まる。新年を迎える気持ちと違うが、転勤や入学式が行われるので、何となく改まるような気がする。特に、新しいランドセルを背負い、何もかも下ろしたての服装、靴を身に着けた小学一年生、希望と期待に胸を膨らませているものの、やや不安げな姿を見ることができる。この姿を見てみると、自分の入学した頃のことはあまり記憶にないが、嬉しかったことだけは覚えている。「一年生になったなら ともだち100人できるかな……」(1966年まど・みちお作詞、山本直純作曲)や「ピッカピカの一年生」(1978年杉山恒太郎作詞、まふたひとえ作曲)の歌が聞こえてくると、私を新鮮な気持ちにさせてくれる。同時に、頭の中に桜と入学式が何となく結びつき、桜の開花が気になるのである。



長野県薬剤師会薬草の森りんどうの桜

4月の別名に「花のこり月」と言う言葉がある。里で桜が散り終わっても、山では桜が咲き残っているからと、桜好きの日本人が付けた月名である。日本で花と言えば「桜」のことであり、国花としているのも頷けるような気がする。

また、春になると気象情報で桜前線のこと話題となる。3月中旬頃、ソメイヨシノが開花すると、一日約30kmの速さで日本列島を北上する開花の場所を、前線で例えたのであるが、春に相応しい表現と思う。しかし、最近は温暖化の影響で桜の開花が早まり、桜の開花時と入学式の時期が一致しなくなっている。気象庁の「桜開花観測の記録」を調べてみた。全国75カ所の1953～2008年記録によると桜の開花は5、6日早くなっている。この記録は2008年の統計($Y=-0.1011X+39011$)であるが、最近はまだ早まっているかもしれない。気温は変化しても、桜は変わることなく私たちに潤いを与えてくれる。

桜は、爛漫と咲き誇った様、花の散り際の良さ、こんな姿に愛惜を感じ、日本人が最も好む花の一つとなったのだろう。『古事記』(712)に、ににぎみこと おおやまつみかみ瓊瓊杵尊がこのはのさくやひめ大山津見神の二人の娘と結婚する話がある。夫婦になったのは妹の方で、花のように美しい木花開耶姫だった。当時桜と言う統一名がなかったため「木之花」は桜を意味していると考えられている。日本人と桜の結びつきの一番古い記述である。奈良時代(710～784)までは中国文化受容の真っ最中であったため、中国渡来の梅が持てはやされていた。しかし、平安時代(702～1192)になると、紫宸殿前庭の左近の梅しよくにほんぎと桜が交代となる。『続日本記』(797)によると承知12年(845)に左近の梅が桜に変わったらしく、『三大実録』

(901)では貞観16年(874)には左近の桜が記述されているので、この間に梅と桜が変わったようである。

この経緯は『万葉集』(629～759)には梅が110種、桜が43首詠まれているが、『古今和歌集』(905又は914)になると桜は40種、梅は16首と逆転している。そして、この頃



山桜の木肌



山桜の製品

から国風文化が育つに連れて徐々に桜の人気が高まり「花」と言えば桜を指すようになった。桜を愛でる姿も豊臣秀吉の頃の吉野や醍醐の花見から落語に登場する「長屋の花見」と、桜は王朝の花宴から武士階級、更に市民層に広がったのである。

特に、本居長与(1730~1801)が、**敷島の 大和心を 人間わば 朝日に匂う 山桜花**と詠んだことは、日本人の心に桜を強く意識される要因と考えられている。更に、桜に抱く日本人の気持が「花は桜木、人は武士」とその散り際の美しさに心をよせるようになったのであろう。

『新訂牧野新日本植物図鑑』を調べると、桜の名前を冠したバラ科の植物は23種収載されている。樹木の専門家に聞くと桜は変種が容易で、恐らく種類は400種以上あると教えてくれた。この項では多くの人に膾炙されているソメイヨシノを中心に説明したい。

ソメイヨシノは庭、土手等に植栽されるバラ科の落葉高木で高さ7m内外、樹皮は灰いろ、若枝は有毛又は無毛、葉は有柄で互生、広い倒卵形、先端は急に尖っている。4月初め、新葉より先に散開状に密集した淡紅色の数個の5弁の花を開き、全枝が花でうずまり美しい。核果は球形、径7~8mm、紫黒色に熟し多汁である。

昔から、桜を詠った詩歌は数多く、『万葉集』(629~750)に収載されて以後、多くの人々が取り上げてきた。

世の中に たえて桜の なかりせば 春の心は のどけからまし 八田 知紀

世の中は 桜の咲くも 小うるささ 小林 一茶

植物名の由来は、桜は輔詔時代の「さきにさくらん、ほまくにさくらん」の説、前述した『古事記』の説の諸説あるがはっきりしていない。

ソメイヨシノの植物名は、牧野富太郎博士は「日本名は染井吉野で、始め東京の染井の植木屋から世に広めたためである。元来植木屋では本種を吉野と呼んで桜の名所、吉野山の桜になぞらえていたが、単に吉野と言ったのでは、吉野の山桜と混同するので、明治5年(1872)に初めて染井吉野の名がつけられた。本種は明治維新直前頃にはじめて東京に出現したもので、江戸の桜でないであろうから、これに yedoensis の種小名をつけたのは適切ではない。朝鮮半島の済州島に自生することが分かっているが、一般に植栽されているものは、系統を異にしているのであろう。ウバヒガンとオオシマザクラの雑種と言うのが一番可能性がある。」と述べている。

桜そのものは日本人になじみの深い植物だけに多くの別名がある。主なものは、この花、かざし草、吉野草、曙草、夢も草等が存在している。学名は Prunus × yedoensis で、属名は plum (スモモ) に対するラテン古名、種小名は江戸の意味である。

薬用に使う桜は山桜が主で、様々な部位が使われる。生薬名は「桜皮」(樹皮を剥ぎ、剥離し易いコルク層を削ぎ落とし、更に緑がかった内側の皮を削り取ったもの。)、**「桜桃」**、**「桜膠」**(おうこう 樹幹の傷から滲出する樹脂)と呼んでいる。その他に「花」、「葉」が利用される。効能は、桜皮は解熱、しやくり 吃逆、打撲傷等に、桜桃は食中毒、えい 洩精、強壯に、桜膠は痰きり、中国では山人の食べ物とされている。花は食中毒、桜責を二日酔、薬用酒に、葉は浴用剤としてあせも、咳止めに応用している。

食用には葉(主にオオシマザクラ)の塩漬を桜餅や葛桜を包むのに用いる。花は蕾を塩漬けにして桜易に使う。その他、桜は材を木工品に、樹皮は箱物等の飾りに珍重したり、花、樹皮、根を染料に利用する。秋田県角館の桜革細工は有名で、特に茶筒は使うほどに味が出るので有名である。

花言葉は普通「精神美」「優美な女性」「純潔」とされている。



松本市弘法山古墳の桜